

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センターたより



カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター事務局

〒604-8006 京都市中京区河原町三条上ル

発行人／奥村 豊

TEL 075-366-6609 FAX 075-366-6679

E-mail: bukatu@kyoto.catholic.jp

Home Page <http://www.kyoto.catholic.jp/bukatu/>

ポンコツ司祭より

奥村 豊（京都教区司祭）

2023年10月7日（土）に京都市役所前から約150人のデモ行進が催されました。新型コロナワクチン被害者追悼デモで、市役所から円山公園までを往復しました。テレビマスメディアのキー局ではほとんど扱われてこなかった、新型コロナワクチン被害者の訴えを、途中亡くなった方々の紹介と僧侶の読経を挟んだものの、シュプレヒコールなしで行われた文字通りの追悼デモでした。

この時点で予防接種健康被害者救済制度の認定を受けた死者は200人を超え、過去44年間でこの制度の救済認定を受けた人数を上回っています。厚労省の新型コロナワクチン副反応検討部会に報告されている死者の数は2000名を超えています。その内、死亡とワクチン接種の因果関係を認められているのは未だに数名で、ほとんどは「因果関係不明」で処理されています。先の救済制度は被害者救済の迅速性に鑑み、厳密な因果関係を必要としないので、このようなねじれが生じているのでしょうか。それにしても、ワクチン接種後に亡くなった方々に、現場の医師たちがワクチン接種が原因の可能性があると報告している事例について、そのほとんどを「因果関係不明」としているのは実に不自然です。実際接種後に亡くなられた方々の内、接種翌日が最も多く次いで当日となっています。これは偶然でしょうか。

さらに気になる数字もあります。日本で新型コロナ感染症が本格化した2020年の全ての死亡者の超過死亡は、前年の2019年に比べて1万人近く減少しています。つまり、2020年は新型コロナが流行したはずなのに全体の死者は減ったのです。ところが、感染対策が徹底されワクチン接種が春から開始されたにもかかわらず、2021年には超過死亡が約6万人増加しています。これは東日本大震災が発生した2011年の超過死亡を上回っています。さらに2022年の超過死亡は突如13万人を超えました。2023年とはいうと、既に超過死亡は10万人を超えています。2021年からの3年間の超過死亡を合計すると、30万人近くの方が何らかの原因で例年より多く亡くなったこととなります。新型コロナ感染症が収束していないことを理由に説明する人もいますが、社会活動が抑制され、多くの人がマスクを着用し、その上で1億人が少なくとも一度のワ

ワクチン接種をしているにもかかわらず、なぜか何らかの理由で普段よりも多く人が亡くなっていくとしたら、社会で起こっている現象に対する根本的な認識が大きくまちがっているとするのが妥当ではないでしょうか。

新型コロナウイルス感染症に対する政策や医師会の態度、マスメディアの報道に対して 2020 年の当初から疑問を投げかけてきた人々は著名人にもいましたし、医師や学者の中にもそういった人たちはいました。彼らの見解には細かな差異はありますが、2021 年から開始された新型コロナワクチン接種を停止すべきであるとの見解は一致しています。主だった人たちを挙げてみます。大阪市立大学名誉教授井上正康さん、京都大学名誉教授福島雅典さん、名古屋大学名誉教授小島勢二さん、京都大学准教授宮沢孝幸さん（2024 年 5 月に退職予定）、医師・医療ジャーナリスト森田洋之さん（医療破綻した夕張市に派遣された体験から日本の医療問題に様々な角度で警鐘を鳴らしている）、医師内海聡さん（ワクチンそのものに反対している）、ジャーナリスト鳥集徹さん（以前から医療利権の問題に取り組んでいる）、国際ジャーナリスト堤未果さん（グローバル金融資本、環境問題などに関する著書多数）などです。ネットで検索すれば簡単に出てくる人たちです。他にもたくさん著名な人たちはいて、繰り返しますが細かな差異はあっても新型コロナワクチン接種には反対の姿勢を示しています。

もちろんワクチン接種を推進している医師や学者やジャーナリストもいます。コロナ騒動が始まって以来、連日テレビでコメントしていた人たちはもう覚える努力をしなくてもその名前を皆さんが覚えてしまっていることでしょうかから敢えて挙げはしません。しかし問題はここからなのですが、マスクにせよワクチン接種にせよ法的義務ではなかったのです。飲食店の営業制限や県をまたいでの移動制限も義務ではなかったのです。にもかかわらず、テレビで連日繰り返される情報はあたかも大本営発表のごとくに国民生活を制限しました。いまだにその後遺症が残っていないでしょうか。新型コロナウイルス感染症が 2 類から 5 類に移行され社会的緊張がほぐれつつある今、政策の誤りや医療利権の闇などが取りざたされ始めました。しかし、これは先に挙げたジャーナリストたちが、コロナ前から訴えていたことです。同時に大手のマスメディアがずっと無視してきた問題です。

この辺でジャニーズ事務所の事件がリンクしてきます。あの事件は性的虐待とか芸能事務所の腐敗とかの問題ではなくて犯罪隠蔽の問題です。もちろん起こった事柄は赦しがたいのですが、社会的影響力のある団体が隠してきた事実を本来は調べて明るみに出して反省を促し、被害者救済を訴え、正義を叫ぶのがメディアの役割であるはずが、自らの利益のために加害者と同じように隠蔽し続けたのです（週刊誌はとり上げましたが）。カトリック教会にとっては映画「スポット・ライト」が想起させられます。がんじがらめの社会的制約の中であって、もがきながらも権力の不正を明るみに出す。それがメディアの大きな役割でしょう。それがこの 3 年余りのコロナ騒動の中では見事に裏切られた感があります。

そんな中、ふたつの地方テレビ局が新型コロナワクチン被害について報道し続けています。名古屋の CBC テレビと神戸のサンテレビです。特に CBC の大石邦彦キャス

ターは独自取材と分かりやすい解説で、局の番組と SNS や動画配信とを通して情報を発信してきました。その功績が報道者として表彰されてもいるのです（2023年5月第60回ギャラクシー賞「新型コロナワクチンの副反応問題に関する調査報道」）。これは社会的に大きなインパクトのあるテーマに関する継続的報道であるのにもかかわらず、一般大衆にとっては努力しなければとどろつけないほど、全国ネットのキー局にとっては扱う価値のないトピックなのでしょう。というより都合の悪いニュースだったのです。なぜ都合が悪いのか。それはスポンサーにとって都合が悪いからです。

冒頭の追悼デモには大石キャスターが取材に来ていました。デモに参加した人たちは「あっ、大石さんが来てる！」と。東海地方では夕方の「チャント」という番組でおなじみの方なのですが、小柄で軽快に取材しておられました。インタビューの最中は相手の話にしっかりと耳を傾け顔を覗き込んでいる様子がいかにプロだなあという印象でした。限られたわずかな時間の中で、どうやって被害の実態や被害者の思いを伝えられるか。そうは言っても組織の一員に過ぎない中でどうすれば本分を果たせるか。そんな葛藤の日々にちがひありません。

現在国連の WHO ではパンデミック条約なるものが計画されているようです。パンデミック宣言はこれまでも幾度か出されてきましたが、まるで大きな計画の集大成のように条約として打ち出されてくるようです。この流れで行くと、そのうち日本の国会でもとりあげられるでしょう。WHO の運営資金は他の国連機関もそうですが、各国が均等に出資しているわけではありません。WHO の場合その資金提供の上位にビル&メリンダ・ゲイツ財団と世界ワクチン同盟が名を連ねています。前者の理事には日本の製薬会社の会長もいました。WHO の事務局長テドロス氏はエチオピア人。首都アジスアベバの空港建設には中国から莫大な資金が投入されました。かつての事務局長マーガレット・チャン氏とその椅子を争ったのは、今回のコロナ騒動で中心的な役割を果たした医師です。この辺りのことは堤未果さんからの情報です。さまざまな事柄が不思議に結びついてしまいます。金の流れを追うこと（follow the money）と人事を抑えることは、社会の実態を知るための常道のようなのです。

人々の健康や地球の環境のためといえば、善意ある人ならば誰しも協力を惜しみません。しかしその目的設定が正しいとしても、その取り組みが本当に健康や地球環境を守るためになっているかは、十分に吟味しなければならないでしょう。特にその取り組みが人権を侵害することにつながるのであれば、政府や国際機関、医療機関などの権威を妄信するのではなく、一人ひとりが情報を収集し人権感覚を研ぎ澄ませて自らを守るよう心掛けなければなりません。そして、イエスのように神殿を清めることはできないとしても、自らが偽善に陥らないようにすることはできるでしょう。

それにしても日本のポンコツマスメディアなんかかならんか。ポンコツ司祭より。



#94 佐渡は何が...

「あるかないか言えない」 世界遺産めざす佐渡金山でお蔵入りの名簿

朝日新聞デジタル・連載・多事多端・記事

自由記事

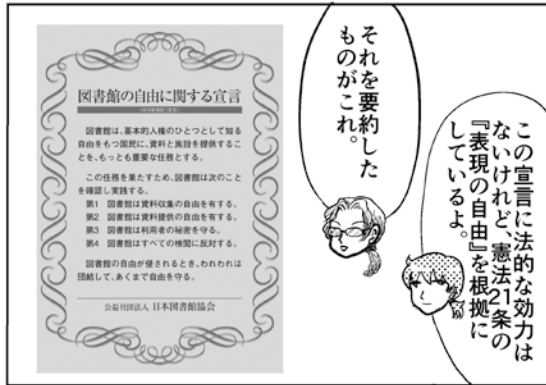
編集委員・田玉恵美 2023年12月2日 12時00分

記事を要約すると...

- ・記者が世界遺産登録を目指す佐渡金山について、かつての鉱山会社が提供した「佐渡鉱山史」を新潟県立図書館が所蔵しているという情報を得て資料請求をしたが、蔵書の有無さえ非公開と職員から告げられた。
- ・他にも金山で働いた朝鮮人労働者の名簿なども同様の扱い。
- ・元の所蔵会社は原本のない資料については非公開としている。
- ・しかし、原本のない資料でも公開されている資料は世の中にくらでもある。

#95 図書館が危ない？

#96 '23年巨額増税...



黒川先生の講演を聞いて

山本 栄子



狭山事件についてはたくさんの方々が書いておられますが、石川さんご夫婦の日々の生活について、ここまで掘下げて手に取る様に書いておられる黒川先生のお話を聞きながら、部落に生まれた石川さんと私は、部落差別によって小学校へも満足に行くことが出来なかった。私も苦勞したがそれ以上に石川さんは苦勞しています。

貧乏で教科書も買ってもらえなかった石川さん、私もそうでした。近所の子どもの古い教科書をもらい、持って行くが破れていたりページが抜けていたり、先生は部落の者はこんな教科書しかないのかと露骨な差別をする。先生に

怒られる度に家はうちは何でこんな貧乏なんやうちの町内は隣近所も同じ様な生活状態で疑問だらけの日々でした。石川さんも満足に小学校も行っていない。文字を持っていない私の祖母は「味噌や醤油は借りることは出来るが文字は借りることが出来ない、そこからしっかり勉強しいや。文字がない程悲しいことはないで」、と口惜しがる。

狭山事件は部落差別によって文字を奪われた部落民の問題だと私は思う。

石川さんも若い時は文字を知らない事で職場を転々と変わって行く、それは仕事に慣れてくると伝票や納品書を読んだり書いたりしなければならない。文字は書いてあたりまえと思う世の中で、人にも言えず相談も出来ないで一人で苦勞してきた。そんな石川さんを怠け者と世間からは見られる。

1994年12月21日石川さんは仮出獄になった。冤罪者だから社会に出てもたくさんな制約があります。31年7ヵ月の獄中生活から出て来た石川さんは浦島太郎の様だと思います。社会生活の経験がない、そんな石川さんをいままで支えて来た早智子さんの苦勞を思うと書いていても涙で文字がかすみます。

石川さんが出獄した日に記者さんに頼まれた詠です。「冤罪の受刑生活解かれども故郷に立てどわれは浦島」

1947年に早智子さんも徳島県の被差別部落に生まれたが自分の出自は誰にも言わなかった。狭山集会に参加して石川さんと出合ってから堂々と自分の置かれている立場を自覚した早智子さん。



32年間も一般社会から隔離状態に置かれていた石川さんは何を見ても聞いても素直に喜び涙する。そんな石川さんを見て早智子さんはこの人と一緒に苦楽を共にしようと思ったのでしょうか。

そんな早智子さんと出会えた私もうれしかった。

部落解放同盟の女性集会の分科会では狭山闘争の司会もよくしていたので一雄さん早智子さんの話もよく聞いた。その中で一雄さんは「夜間中学へ行きたいから健康にも気を付けているよ」と

部落の解放には教育が必要です。石川さんの見えない手錠をはずすまで、中学へ石川さんを入学させるためにも、狭山事件を教訓に第二第三の石川一雄をつくらぬよう、社会問題として各々が自分の問題として向き合っていきましょう。

2016年12月「部落差別解消推進法」が制定された。部落差別は社会問題と位置づけています。決して部落民だけの問題ではない。

差別する側、される側がしっかり学習して、すべての人が差別から解放される日を目ざして石川さんの無罪判決実現に向かって頑張りましょう。

黒川先生ありがとうございました。

すばらしい会場でカトリック教会の

狭山差別事件のシンポジウム開催

稲村 守



私は16歳の時に高校1年終わりころ、たまたま郷里の山形県寒河江市のとある本屋で三省堂新書の「むのたけじ」・岡村昭彦対談の『1968年・・・歩みだすための素材』を手にし、フォトジャーナリストの岡村さんの「部落問題が原点だ」という強烈な問題提起に引き込まれました。南ベトナム戦争従軍中のジャングルで、林屋辰三郎・立命館大学文学部日本史学科教授の岩波新書『歌舞伎以前』を読んで感銘を受けたという話に感銘し、その大学入学を急遽めざし18歳で関西にやってきました。

その後、縁あって「総評地方オルグ」という就職口を得て、大学卒業寸前に労働組合専従者となり、来年で半世紀となります。

その総評オルグの大先輩から、地元の大学の黒川みどり教授からこういう本が贈呈されてきて読んだが、今までにないいい本だ、ぜひ入手して読みなさいとアドバイスを受け、一気に読了して感銘し、大阪に黒川教授が見えられると聞き及び、一も二もなくこのシンポジウムに参加させていただきました。

こんなに早く黒川さんにお会いできるとは思ってもみませんでした。機会を作っていただいたカトリック教会関係の皆さんに心から感謝申し上げます。

小生の知るキリスト教会関係の建物と言え、町や村のお寺さんの西洋版というイメージですが…規模と言い、たずまいと言い・・・それがなんとすばらしい「吹き抜けの(?!)」えも言われぬ礼拝堂って言うんですか・・・「うわっ、ここで講師が二人もいて、無料でいいの?!」という、デラックスな、ゆったりした椅子にかけさせていただいて、夢にまでみた黒川教授の講演を聞ける・・・日ごろ、極めて庶民的な「教会」に慣れ親しんでいる(お祈りではなく、会議や集会で使用させていただいていますので)身からすると、まず物理的シチュエーションで度肝を抜かれました。

さて、話を本筋に戻すと、最初に部落解放同盟中央本部狭山闘争本部・安田聰事務局次長の「狭山事件とは？」というところから始まる報告を受け、黒川さんから岩波書店から出版された、石川一雄さんの生い立ちなどからの、狭山事件石川さん無実の証ともいえる本の内容をお話いただきました。出されたばかりともいえるこの本、絶版ならぬ“品切れ”となってしまう、この日も販売などでできずとのことでした。

「冤罪を生む日本の社会構造」というテーマでもありましたし、質問も安田さんに集中していきましたが、“この秋、再審へ!”無罪獲得で、石川一雄さんの見えない手錠からの解放!!という点ではなかなかデリケートな厳しい情勢であることも知りました。が、帰り、大阪有数規模の書店である梅田の紀伊国屋書店まで10数分で徒歩でたどり着き、政治経済・社会問題関係のコーナーを見たら、なんとこの黒川さんの本：『被差別部落に生まれて・・・石川一雄が語る狭山事件』が書評と一緒に大きく宣伝ポスターが貼りだされ、小生が先日読了した同じく黒川さん著の平凡社文庫もたくさん並び、かつ鎌田慧さんの岩波の『狭山事件の真実』もたくさん並び、「最高裁判長よ、これを見よ!!」という勢いで、大変勇気づけられました。

大衆運動こそが展望を切り開くと思います。黒川さん、安田さん、カトリック教会のみなさん、本当にありがとうございました。

狭山事件の再審を求める市民集会に参加して

佐藤 恵

(部落差別人権活動センター運営委員)

2023年10月31日、狭山事件の再審を求める市民集会が日比谷野外音楽堂で行われ、部落差別人権活動センターの運営委員として参加した。部落解放同盟の方たちや、部落差別を無くす運動に取り組んでいる宗教者たちが席を埋めていた。

狭山事件とは、1963年5月1日、埼玉県狭山市で女子高生が行方不明となり、身代金を要求した犯人を警察が取り逃がし、その後被害者が遺体となって発見されたという、痛ましい殺人事件である。取り返しのない失態を犯した警察は、何としても犯人を捕らえなければならぬと意気込み、何の根拠もないまま被差別部落に狙いを定め、地域の住人である石川一雄さんを別件逮捕した。石川さんは当時24歳。その後警察のでっち上げた証拠により、1審で死刑判決、2審で無期懲役、32年の獄中生活を余儀なくされ仮出獄。2006年に裁判所に3次再審請求を申し立てたが、再審は行われず今に至っている。石川さんは現在84歳。60年間、無実の罪によって見えない手錠につながれたままである。

部落差別によって当時は非識字者であった石川さんが脅迫状を書けるはずがなく、筆跡も本人のものではない。被害者のものとされている万年筆は、石川さんの自宅から3回目の捜索で、後から誰かが置いたとしか思えないような不自然な形で発見されている。また、中のインクの成分分析で被害者のものではない可能性が明らかになってきている。証拠となる録音された自白の様子は、素人が聞いても誘導されたものであることは明白である。

弁護団は昨年8月、東京高裁に事実取調請求書を提出し、新証拠を作成した鑑定人の証人尋問と万年筆のインク資料の鑑定の実施を求めたが、いまだ応じられる気配はない。

集会には、冤罪事件で無罪となった方が何人か来ておられ、壇上で発言されていた。共通していることは、みんな何らかの偏見によって犯人にされているという事実だ。無罪を立証する明確な証拠が提示され、再審によって自由になっておられる。石川さんだって、無罪であることを示しているゆるぎない証拠がそろっているではないか。なぜ、裁判所は再審に応じようとししないのか。まるで逃げているようにしか見えないのはなぜか。

それは、狭山事件が、数多ある冤罪の中のひとつではなく部落差別事件だからではないか。救えるはずの命を失わせてしまった警察の失態という絶体絶命の危機を、部落の青年であった石川さんに罪を着せることによって切り抜けようとした、国家権力による、まぎれもない「部落差別事件」だからではないのか。再審が行われ石川さんの無実が示されれば、国家権力の犯罪が明るみになる。国家権力への信頼は失墜するだろう。そうすれば、国家権力によって虐げられてきた人たちが力を持つ。政府は、そのことを恐れているのではないのか。だからこそ、私たちはあきらめてはならない。石川さんがお元気うちに、なんとしてでも再審をして無罪を勝ち取らねばならない。そして、この闘いの本当の意義を、ここに示されている真理を、今後も伝え続けなければならないと強く思った。

シリーズ：聖書の言葉

彼らこそ預言者

奥村 豊（京都教区司祭）

「このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」（ヨハネ 20：30-31）



ヨハネ福音書の 21 章にあたる箇所は後代の付加なので、オリジナルは 20 章の上記の文でしめくくられている。20 章では墓に赴いたマグダラのマリア、週の初めの日に家に閉じこもっていた弟子たち、その一週間後のトマスに現れた復活のイエスのエピソードが語

られ、これ以外にも復活のイエスとの出会いのエピソードがたくさんあるが、到底書ききれなかったらしい。しかし、是非これを読んで信じてほしいし救われてほしいとの切なる願いは伝わってくる。そして、ここに書かれていない当時のエピソードに加え、現代に至るまで多くの人々が信じて救われ、復活のイエスに出会ってきたことだろう。できればマグダラのマリアやトマスのように名を残されることなく召されていた数知れない人々がいたことを忘れないようにしたいと思う（「死者の日」だけではなく）。

福音書には、よみがえりや癒しに関連してラザロやバルティマイなど、名が記されている人物もわずかながら登場するが、もちろんイエスから癒してもらったり悪霊を追い出された者でその他大勢に属する者の方が多いだろう。さらに気に留めて思いめぐらしたいのは、病気や障がいや社会的疎外によって、この世で苦しみ続け志半ばで召されていった人々のことである。聖書はヨハネ福音書が最後に締めくくったように、書ききれないほどの救いのエピソードのほんの一部が記されている。だから、書かれていないことの方が圧倒的に多い。当たり前なことだ。書き記すということはある意味、書かれたわずかなことを通して書かれなかったことへ目を向けさせる方法なのである。したがって、癒され救われ名を記された人々、名は記されなかったが癒され救われた多くの人々、そして癒されず救われなかったと思われる人々へと想起を展開していくことも当然の思考のなりゆきだ。



人権侵害された人々、例えば隔離されたハンセン病者や冤罪被害者、公害患者や薬害被害者などは、その多くの人々が自分や家族の救済を求めて闘っていく途上で、同じような苦しみを味わってきた他の仲間と出会う。そして自分の闘いが自分だけのこ



とではなくて、人間社会の重大な課題を克服するための闘いであるという次元に到達していくように見える。権力の理不尽な業によって、自由、時間、希望、人生そのものを奪われているのは自分だけではなくて「あなたですよ」と公に叫び続けている。それが人権救済を求めて闘い続けている方々ではなかろうか。彼らは自分に起きた具体的な人権侵害とそれへの闘争を通して、自分以前に起こってきただろう膨大な数の人権侵害の告発と、放っておけばこれから容易に生じるであろう人権侵害への警告をしつづけている預言者なのではなかろうか。記されなかった人権侵害被害者の無念に目を向け、起こりうる被害を憂いて行動する生きざまがまさしく預言者なのである。

追悼 カトリック大島教会のIさん、Yさん

カトリック和歌山紀北教会 深堀 安希子

2023年中に、カトリック大島教会に所属するお二人の信徒が帰天されました。これをもって大島青松園に入所されている方のうちカトリック信者はどなたも居られなくなりました。これまで大島教会を通じ、信徒会代表だった加藤信勝さん、Mさん、Oさんとお連れ合いのSさん、そしてこの度亡くなられたIさん、Yさんらと出会うことができました。私たちが訪問させていただいた際には温かく迎えてくださり、一緒にミサを捧げたり、お昼ごはんを食べたりしたことが懐かしく思い出されます。大島での出会いと交流に感謝しますと共に、またいつか神様のみもとで共に憩うことができますように。お祈りいたします。(※1)

高松港沖、小豆島との間の瀬戸内海に浮かぶ大島に、国立ハンセン病療養所大島青松園があります。2002年3月に、日本カトリック部落問題委員会は、ハンセン病問題の学びのために大島青松園を訪れ研修会を行いました。(※2)前年には「ハンセン病国家賠償請求訴訟」の勝訴判決が出たということもあり、カトリック教会でもハンセン病問題について学ぼうという機運が高まってのことだと思われます。その合宿で、当時、カトリック大島教会の信徒代表であった加藤信勝さんらと出会ったことにより、その後も、時々お弁当をもって訪問させていただくという機会を頂いてきました。時には、入所されている方のご自身の体験や、将来への想い等を語って下さったこともありました。

大島に入所されていた方々との思い出が、何らかの形で残されていくことを願いつつ、ここでは、かつての刊行物に掲載されている二つの記事を紹介いたします。一つ目は長年カトリック大島教会の聖心の信徒会代表を務めておられた加藤信勝さんの書かれたものより、二つ目は大島青松園で自治会長をされていた山本隆久さんへのインタビュー記事よりの抜粋です。

○「小さくてもいいから聖堂がほしい」

(……私は一九四九年(昭和二十四)六月二十四日に、高松の教会からサンタ・マリヤ神父さんはじめ、大勢の信者さんと聖歌隊の方がお見えになりまして、ここ(大島青松園)で洗礼を受けました。その後、何人かの方が洗礼を受けました。)

大阪から田口司教さんが二回ほどお見えになって、堅信の秘跡も行われました。私たちは司教さんに「小さくてもいいから聖堂を建ててください」とお願いしましたが、なかなか実現しませんでした。(改行)一九五三年(昭和二十八)にザベリオ会のペルー二神父さんがお出になるようになってから急速に話が進み、一九五三年(昭和二十

八) 十二月に定礎式が行われ、一九五四年（昭和二十九）五月三十日に立派な聖堂が完成しました。……（※3）

○棧橋を改修し島全体を社会に開放する

そのために将来をここでやっていくというのに、一番心配なのは棧橋なのです。…（略）…それができると、大島そのものが社会に対して開放もできますし、何ととっても今は大島と海洋船で高松を結ぶ、国の船で動いていますから、かつての島流しというイメージが偏見として残っています。そういうことから解放できます。その民間船の寄港を実現させると、そのような島流しのイメージからの脱却だとか、偏見差別を少しでもなくすことができます。長島では「人権回復の橋」といっていますが、その橋に替わる足として、棧橋を改良させたい。そういうことを考えて、できるだけ大島そのものを、社会に開放する社会資産として残してくれたらいいのです。（※4）

現在、大島青松園全体でも、入所されている方の高齢化が進み、今後の方針を検討されているそうです。全国にある療養所 13 園の中で、唯一、陸と繋がっていない「島」ということが、社会との共生という将来構想を実現する上での難しさでもあるそうです。しかしその中にあっても、今、棧橋の改修工事は進められており、園内にも歴史展示や資料展示、図書室のスペースが新たに設けられました。今回、私たちが訪れた際には、近隣の島から課外授業に訪れる小学生らの姿も見られました。「島を社会に開放したい」という願いの声に呼応して、実現されていくものがあるのだと思いました。私たちも、この大島での出会いから頂いたものを大切に心に留め、次世代に繋いでいく方法を模索しなければならないと感じ入りました。

<注釈>

※1 大阪教会管区部落差別人権活動センターとしては、ご縁を頂いて以来、事務局スタッフを中心に訪問させて頂きました。高松教区（現・大阪高松教区）桜町教会による定期訪問や個人訪問もあり、カトリック大島教会備え付けの訪問記録に様々な交流の記録が記されています。

※2 現・日本カトリック部落差別人権委員会による合宿。2002年3月2日～3日、「いのちの歴史をかえりみて」をテーマとしてハンセン病政策の歴史や、国賠訴訟、尊厳の回復について学ばせていただきました。

※3 加藤信勝「ときをいきる」（日本カトリック部落問題委員会『いのちの尊厳をかえりみて 尊厳回復へ』、2003年

※4 活動センターたより 2008年春号、夏号に、山本さんへのインタビュー記事が掲載されています。

大島青松園訪問の反省

太田 勝（福音の小さい兄弟会）

京都の橋本シスターなどに誘われて青松園を訪問したのは、10年か15年前でした。当時はY・Oさん、R・Iさんともう一人3人のカトリック信者が居て、高松発11：15分の連絡船で島に渡り、大野安長さんの部屋でミサの後昼食を食べてから、散策をして14時過ぎの連絡船で帰ってくるという一日でした。そのうち入所者の皆さんの生涯が書かれた文集が発行され、そこでY・Oさんのこともおおよそ分かることになりました。

文集が既に手元に無いので記憶していることだけメモしてみますと彼は高知県の出身で、17才ころ発症し、むりやり青松園につれて来られ、故郷に戻りたくて、毎日、高松の街の灯が見える浜辺に座って泣いていたそうです。半年ほどしてからあきらめて、魚を捕り若者同士で酒を飲み交わすことで憂さを晴らしていたそうです。当時は自分の部屋の前に3坪ほどの野菜畑がありましたので、スイカを作ったり、花を咲かせたりで、園の作業の他に、趣味の生活も可能でした。家には一升瓶の焼酎が6本入ったケースがあり、お酒が支えだと分かりました。

僕が行き出す前は、Oさんはよく高松に出かけて、行きつけのお店で遅くまで飲んで翌朝帰ることも結構あったようです。そこまですないと青松園の生活は耐えられなかったことでしょう。シスター橋本たちはOさんがお酒を飲むので心配して、はやく、その日のうちに園に帰るよう一生懸命勧めていましたが、Oさんのペースは変わらなかったようでした。僕が行きだした頃は福島原発震災でお酒をやめていましたが、Oさんのお酒はとびきりの例外にして、連絡船にのる前に、高松駅を出てすぐのスーパーでコップ酒2本ほどを買って、Oさんにつきあいました。

酒好きのOさんはとても喜んでくれて、「これだから、飲める人はいい。」とご満悦でした。もちろん、訪ねてくれるシスター橋本や事務局メンバーとその娘のHちゃん、特に息子の年齢のKさんの訪問はうれしくてイソイソしていました。家族が無い、子どもが無いという入所者の境遇は日本の隔離政策の一番重い負荷であって、ダミアン神父のモロカイ島などでは子どもたちが島の生活を継いでくれているので、日本のように療養所の将来問題といった無益な問題は起こりません。隔離・絶滅政策をとった日本の非人間的な悲劇は真に大きな失敗です。Oさんもどれほど悲しい思いなのか、想像を絶します。勝手な当て推量ですが、ぼくも修道生活に入る前には、自分の子孫を持たないことは大きな犠牲でしたが、それは自分で選んだことで、Oさんたちのように国から無理矢理に押しつけられた場合は、ものすごい大きな人権侵害です。そのような人間としての普通の喜びを奪ってしまったことについての国家の反省が感じられないのは悲しいことです。

小泉首相が「真に申し訳なかった。」と控訴を取り下げたことで、国は過ちを償った、

とじていますが、トンデモナイ誤りです。

ぼくは、和歌山で 1999 年以来、野宿者支援の活動をしています。この活動は慈善事業では無く、正義の実現を目指す活動です。小さなものですが、正義とは、慈善では無く、「その人から奪われている権利、つまり人間らしい住まい・衣服・食事の権利をその人に返す活動」です。住まいとしてアパートを探し、衣類を届け、食事をわずかに一週間に一回だけしか届けられない「みじめな」活動です。これを O さんの場合に適用すれば、「一年 365 日、家族と一緒に居る代わりに、年に 3 回ほど半日訪ね、共に過ごすだけの気休めにもならない活動で、恥ずかしい限りでした。」こんな境涯に追い込んだ国は、とても許せません。ハンセン病対策は、国が国民を勝手に非人間的に扱った大失敗の政策でした。その片棒を担いできた私たちがしたことは、全く何もしないと同事だったでしょう。

反省されること、しきりです。



大島青松園の無原罪の聖母聖堂



一緒に畑を



風の舞

第 15 回対話集会

日 時：2024年2月12日（月・祝）14：00～17：00
17：30～（交流会）

場 所：サクラファミリア サテライト
大阪市北区豊崎 3-12-8

発題者：森 達也さん（映画監督・作家）

参加費：（集会・交流会）3000円
（集会のみ）1000円

定 員：25名（定員になり次第締め切ります。必ずお申込みください。）

※『千代田区一番一号のラビリンス』（現代書館）を読んで参加していただく事をお勧めします。



今回は、映画監督、文筆家など多彩な表現活動をされている森達也さんをお迎えします。

『千代田区一番一号のラビリンス』（現代書館）をテーマに、森さんがどのような思いで作品されたのか、そして日本という社会をどのようにとらえ、希望を見出そうとされているかについて今を生きる私たちに、新たな視点と、希望を見出すヒントを投げかけていただきます。

お申込み：**お名前、所属**（教会名など）E-mail、TEL、FAXで

お問合せ：TEL075-366-6609・FAX075-366-6679

E-mail: bukatu@kyoto.catholic.jp

カトリック大阪教会管区部落差別人権活動センター